

GREEN Sketch

AUTUMN 1999

No. 6



三島郡越路町「もみじ園」にて

C O N T E N T S

未来への贈り物

- ◆ 花と緑二題
- ◆ 公園紹介～紅葉山公園
- ◆ 植物に親しむ
- ◆ 花と緑のイベント情報
- ◆ 緑の愛護団体紹介



ヤマボウシの実 (表紙写真提供：高田 進 氏)

(財)新潟県都市緑花センター

未来への贈り物

緑百年物語
100
GREEN One hundred
Niigata

にいがた『緑』の百年物語

木を植える県民運動

にいがた『緑』の百年物語の呼び掛け人の一人として活躍される、赤井昭さんにお話しを伺いました。



あかい しょう
赤井 昭さん プロフィール

新潟大学医学部卒業後、県立ガンセンター新潟病院勤務を経て、現在、県教育委員として活躍される一方、新潟の緑を復活させようと、にいがた『緑』の百年物語の呼び掛け人として力を注いでいる。

〔なぜにいがた『緑』の百年物語という運動が始まったのですか〕

平成10年1月の、平山知事と作家の新井満氏の対談が始まりのきっかけとなったのですが、20世紀に傷ついた緑を21世紀で取り戻し、22世紀がくる時には立派になった自然を贈り物にしたいという話を話されたんです。それならこの運動をいまいしよと県民有志による呼び掛け人会が発足し、「木を植える県民運動」への参加を提言しました。それを受けて、昨年全国都市緑化フェアの閉会式で、知事が「21世紀の百年をかけて緑の物語を語り継ぎ、『緑の遺産』を22世紀の県民に残そう」と提唱されたのです。

〔緑化運動というものは違うのでしょうか〕

緑の遺産作り―22世紀への贈り物をテーマに、20世紀に人間が自然を破壊したことへの修復のため、

21世紀に木を植え、守り、育て、そしてふるさと新潟の豊かな自然を取り戻して22世紀へ引き継いでいこうという、物語性をもつ運動です。山で木を育てたり、街に公園を造ったり、花を植えたりというだけではなく、その土地のあるべき姿を考えて、地域性のある植物を植えていく。そしてその地域の人達一人一人が、自分達のふるさとを緑を増やしていくという事なのです。出来上がった時に、その土地らしい、またその地域のものになっているということが大切なことなのです。

〔この百年で自然あるいは緑への関心は、どのように変化していると思われますか〕

終戦直後の頃は、例えば女の子がいれば桐の木を植えましょう、お嫁に行く時にそれがたんすになりますよ。つまり、20年先をみていたわけです。そんな環境で育つと、この木は大切なんだという気持ちで自然と育っていくはずなんです。けれど、それをたんにしようという時、伐採のお金や運搬費がかかるからということと経済性を重視してしまい、その木への思いを活かす場がなくなってきたように思います。ログハウスを作るような場合も、外国産の資材を使い、邪魔な木は伐採してそこに建ててしまうというように、本来そこにあった木の出番がなくなってきたのです。けれど、自分の村にある林を間伐し、伐採木をその地域の経験豊かな人達に協力してもらって製材すれば、学校の教材として活かす事ができるし、その木自体も育つのではないのでしょうか。そういう事が最近見直され、緑をもう一度注目する

気運が高まってきていると思います。

〔物語性のある緑を増やすだけでなく、他に期待することはありますか〕

山奥、大都会、海岸線等様々な場所で育つべき植物があるのだから、そこに相応しくない植物を植えれば育つこともできないわけですよ。そういうものを植えるべきかを考える必要がありますね。

例えば棚田は急斜面の水を個々の田で受け入れることで洪水を防ぐ機能があるのに、機械をいれるために平地にしてしまい、棚田のもつ緩衝作用が効かなくなってしまう。棚田が起きるようなこともありますよね。本来そこにあるべき姿を考え、地域性のある緑で覆われた状態をつくるべきです。その過程が、職人さんによって行われたのでは、そこに住む人の緑にならないわけです。緑を育てると一緒に住む事に意味があるのだから、その土地をどうしているのかという事を、住民がコミュニケーションを図りながら作る事が大切です。自分の家の前の除草をしても、周りが草だらけであれば結局きれいにならないですよ。地域全体できれいにしようという意識をもってコミュニケーションを図っていかないと育てられないでしょう。

大人になつてから、さあやりましたよといつてもすぐにできるわけではないのだから、子供の頃から、植物はどんな風に育つのだろうという事を身を持って知る必要があるし、愛情をもって育てれば植物はそれに答えてくれるんだと知る事も必要なのです。とにかく生き物に接するチャンスが必要で、育て

るといふ心”を育むことが、とても大切です。

〔今の子供達の緑に対する関心はどうでしょう〕

子供達の関心がないのではなく、そういうチャンスがないのだと思います。大人がおもしろいね、きれいだねという反応をしなければ子供はわからないですから。エアコンの効いた部屋の中でゲームをし、外で自然と触れることが少なく、自然の風の気持ち良さを感じられなくなっているんですね。便利さや経済性を求め、手間をかけないようになつてきていますが、実はその手間が無駄ではないのです。生きるための和みやゆとりなのです。小さな時から緑になじみ、自然の良さを知ってもらう事も、この運動の目的の一つです。

〔現在の活動状況と、今後の活動について教えてください〕

平成13年から全県下で軌道に乗せようということなので、現在は準備委員会が活動しています。これから百年をかけてこの運動を行っていくことを県民に知らせること。また、各地域で“やろう”という気運が高まるようにしたいと思っています。そのため、今後シンポジウムや植樹祭等、他にも様々なイベントを行います。ネットワーク作りが当面の目標になります。これは県民主導型の運動なので、地域住民の人達がしたいことをすることが第一です。

ですから、行政からは情報提供や土地の提供、ネットワーク作りのお手伝い等を行ってもらうことになります。

〔百年後の新潟はどの様になっていると思われますか〕

百年前のまだ傷つけられていない頃の自然豊かな状態を取り戻すことが、第一の目標。そのことが、余裕を失った人間の心を癒してくれるはずだと思うので、調和のとれた心豊かな生活が営まれているであろうと思います。

〔赤井さんから県民の皆さんにメッセージをお願いします〕

周りに素晴らしい自然があり、心豊かな生活を送れることに誰も異存がないと思うんですね。しかし、それを実現するには一人では無理があると思います。皆で一緒にやりましょうという気持ちを持つことが、まずスタートです。植物を育てる事には喜びがあります。体験したことのない人も、皆で一緒にやっていきましょう。

今まで便利性、経済性等を追求するあまり、自然を知らず知らずのうちに傷つけてきました。この運動がみなさん自身のものになり、百年後には、本当に自然と人間が共生し合う生活を送っていたいものです。

植物に親しむ

植物で元気になるよう

皆さんは窓から見える木々の緑にホッとすることはありませんか。

「癒されている」という実感はなくても、花や木を見て、知らず知らずのうちに心が和んでいることがあるのではないのでしょうか。

また、実際に園芸の経験のある方は、ほかにも植物が人間にもたらす効果を感じたことがあるのではないかと思います。生長が楽しみで日々の生活にハリが出たり、家庭内やご近所での会話が弾んだり：

このような植物の効果はさまざまな現場で生かされていますが、今回はその一例をご紹介します。

* * *

新潟市にある東新潟病院に足を踏み入れると気づくことがあります。病院内になんと花の多いことでしょうか。各科で趣向を凝らして花を飾っています。

同病院リハビリテーション科長で言語聴覚士の福島久美子さんは語ります。

「私たちの仕事は、患者さんたちに生



写真 廊下に飾られた花 東新潟病院（新潟市）

き生きと暮らしていける力を持っていたき、再び生きていくよかったです。心のリハビリこそが本当のリハビリです。入院が長期化して気持ちが減入っている患者さんが植物とのふれあいがきっかけで元気になったりします。植物は誰もの中に存在する『生きよう』『生きたい』という気持ちと呼び起こしてくれるのです。また、みんなで植物という同一のものを見たり

触れたりして、うれしさを共有することがコミュニケーションの訓練にもなります」

同病院では、過去に何度か病院の一角に鉢花をたくさん置き、ガーデンルームとして開放したことがあり、いつもは静かな迎いがその期間中は多くの患者さんや患者さんご家族でにぎわったそうです。それをきっかけに苗の交換などご家族同士のやりとりも始まったとのこと。

また、看護する側（＝病院のスタッフ）の精神面にもたらす効果も大きいようです。かなり大変な病院でのお仕事ですが、あわたたしく動き回るスタッフの方々は、至る所に飾られている花にずいぶん癒されているといいます。

「今後はますます高齢化が進み、在宅介護もさらに多くなってゆくでしょう。介護される側だけでなく介護する側にとっても、介護に追われる毎日の中で植物が重要な役割を持つようになるとなると思います」と福島さん。

* * *

季節は秋、やがて冬を迎えます。ちょっと気が早いですが、花あふれる来年の春を思うと、今からなんだか気持ちワクワクしてきます。それが植物が私たちの心に与えてくれる力なのです。皆さんも植物に触れ、植物がくれる元気の素を心いっぱい吸い込みませんか。

